

道成寺鐘再建論争と万寿丸

Controversy over the Reconstruction of the Dojoji Temple Bell : MANJYU

海 津 一 朗

KAIZU Ichiro

(和歌山大学教育学部社会科・歴史学教室)

2021年9月30日受理

Abstract

Neither of the medieval hanging bells of Dojoji Temple and Doi Hachimangu Shrine remain on the site. The Dojo Hachimangu bell was moved to Kogenji Temple under the influence of the separation of Shintoism and Buddhism, while the Dojoji bell was transported to Myomanji Temple far away in Kyoto as a "cursed and unlucky bell". Moreover, the two bells were recast without retaining their original medieval form. I would like to explore the truth behind Manjumarū's Shohei Tokusei, or the Dojoji Revival, which was a frame of the Hidaka-gun Namboku-cho Civil War, from the perspective of the fishing bells that suffered a strange fate according to the medieval Dojoji legend. This paper is part of a regional contribution project to academically support Wakayama Prefecture's tourism events in 2021.

序 和歌山大学教育学部の道成寺調査

日本の諸芸能の屋台骨ともいえる「道成寺物」の舞台について、当学部は地元大学の地の利を活かして道成寺文化財の学術調査を実施してきた。

きっかけは2010年の総合教育課程(所謂ゼロ免)授業「地域コミュニケーター論」で「道成寺縁起絵巻」絵解きを実践したのが現地調査の糸口であり、その成果は和歌山県立博物館の企画展「文化財の基礎知識—緊急アピール文化財の盗難・多発中!—」で公開した(海津編2011)。絵解きの語り口と絵画史料活用の教育効果に教育学部の活路を見出したものである。

同課程の廃絶後、社会科・国語科共通の専門授業「文化財調査保存実習」という野外調査実習授業を用いて夏休み集中で道成寺調査を実施した⁽¹⁾。2016年刊行の『道成寺の縁起 伝承と実像』は、調査担当者の大橋直義(典籍)・海津一郎(文化財)・橋本唯子(文書)・吉村輝旭(民俗)と各指導学生たちによる研究報告である(大橋編2016、ついで大橋編2017)。この調査は、大橋氏を中心に紀州経済史文化史研究所に引き継がれて継続中である(2020・21年度コロナ禍で中断)。

大略以上のような経緯で、当教育学部は道成寺の調査に長く深く関わってきた。ところで、今年2021年秋は、「万寿丸生誕七百年祭」の節目として京都の釣鐘を道成寺に「お里帰り」させるといふ力業の興行が行われる年である(万寿丸は釣鐘を寄進した檀那のこと)。道成寺調査に初期から関わり、主に実物史料・史跡を分担してきた私は、この機会に万寿丸寄進の旧道成寺

釣鐘を分析しておく必要を感じ、「逸見万寿丸誕生七百年を祝う会」(万寿会)の時代考証を担当する顧問に就任した。10月24日に京都妙満寺にある道成寺鐘が入寺し(11月28日まで)、その期間中は釣鐘と同時期に造られた秘仏千手観音像(北向観音)の開帳が行われる。道成寺の歴史にとっては節目となる。この際、万寿丸と秘仏を巡る南北朝時代の道成寺の再興について、論点を確認しておきたい。

写真1 2021年道成寺イベントポスター図版表面



1 先行研究の論争点—ふたつの鐘をめぐる

京都に遷った道成寺鐘を再び動座するという行事は、実は今回が初めてではない。16年前の2004年秋にも、今回と同様の「釣鐘お里がえり」行事が初めて実施された。だが、今回のように釣鐘願主の万寿丸に焦点を当てたものにはなっていない⁽²⁾。万寿丸を甲斐源氏の逸見氏に比定して、その生誕700年を節目として祈念する今次の行事は、地域の歴史を重視した企画といえる。

16年前にこの行事に密着取材して『道成寺鐘の真実—光源寺鐘との比較を通じて—』(2005年和歌山大学日本史ゼミ卒業論文)を書き上げた山本真由(現姓北澤)氏は、道成寺鐘をめぐる先行研究について、次のような論点整理を行なっている(山本2005)。これを参照しておくとして「1章 道成寺の釣鐘」で、①安珍・清姫伝説、②娘道成寺など「道成寺物」および③髪長姫宮子伝説という一連の道成寺芸能における鐘の描かれ方を確認する。現実の正平14年(1359)鐘供養が、著名な物語に関連して「創作」されていないかを検証するためである。鐘供養が直接関わるのは②の芸能であるが、万寿丸・逸見氏・南朝・正平年号などいずれも②の内容とは直接関わるものでないことが指摘される⁽³⁾。

「2章 紀伊に残る兄鐘・光源寺鐘」では、道成寺鐘の鑑定に欠かせない土生八幡宮旧蔵鐘(町指定文化財として和佐光源寺に現存)の調査データを示して、江戸時代(1749年)の改鑄、1903年明治の廃仏毀釈で鐘の移動する過程を示す。地元では「兄弟鐘」の語で意が通るほどに、万寿丸の寄進した光源寺鐘と道成寺鐘は一体のものだったという(正平13年作の光源寺が兄、14年の道成寺が弟、現在の大きさも総高122cmと105cmで一回り異なる)。

「第3章 光源寺鐘と道成寺鐘」では、2章の成果をもとにして、京都に移された道成寺鐘を調査して比較する。銘文および形状を比較し、主に坪井良平氏の中世梵鐘編年論の成果を紹介しつつ、道成寺鐘は中世鐘でなく、江戸期に改鑄されたもの(ただし銘文はオリジナルを再現した)と結論した(坪井1972の1190・1192号)⁽⁴⁾。つまり山本氏の結論は、源万寿丸が寄進したふたつの鐘は、どちらも中世14世紀の原状ではないが、妙満寺に移された旧道成寺鐘の方は、銘文や形が旧来の鐘を踏襲しているというものである。この研究史整理は、最近年の道成寺研究でもほぼ追認されており、私もこれを前提にして進めたい。山本氏の著作は、これ以外にも道成寺鐘が京都に遷る原因・過程についての諸説(新宮の人の購入寄進説、天正の秀吉紀州攻めにおける略奪、同仙石秀久の寄進説など)のバリエーションについて紹介・整理しており、道成寺再建論争を考える上で糸口となる。

2 梵鐘銘文の解読

まず鐘自体は中世のものではないが銘文については

依拠できるという先行研究の評価に従い、万寿丸のふたつの鐘銘を年代順に示そう(以下A Bと略記)。共に近世の改鑄鐘であるので形態編年・刻印字体等の比較はここでは行わない(なお本論では「兄弟鐘」という用法は避けたい。これ自体がひとつの価値観を植え付ける物語作りの操作アイテムだからである)。

写真2 A土生八幡宮鐘 写真3 B道成寺鐘
(山本真由撮影2004年)



史料1 A土生八幡宮旧蔵梵鐘銘文 ○和佐光源寺
総高122cm 口径部85cm

(池の間2区)

聞鐘聲 知恵長 菩提生 煩惱輕
離地獄 出火坑 願成佛 度衆生
天長地久 御願円満
聖明斎月日 叡算等乾坤
八方歌有道之君 四海樂無為之化

(1区)

紀伊州日高郡矢田之莊千手里
八幡宮 源万壽丸奇附
御神前治鑄鐘

飛鳥宮 山田道願作
(西暦1358/04/23)
正平十三<戊戌>三月十五日

(3区)

再興 治鑄鐘
(西暦1749/04/02)
寛延二<己巳>二月十五日

土生・小熊・藤井・鐘卷氏子中
神主 瀬戸平治 藤原和重
若野村
津村正重作

(* 明治の移転銘は略)⁽⁵⁾

史料2 B道成寺旧蔵梵鐘銘文 ○京都岩倉妙満寺
総高105cm 口径部63cm

(池の間1区)

聞鐘聲 知恵長 菩提生
煩惱輕 離地獄 出火坑
願成佛 度衆生
天長地久 御願円満

聖明齋日月 叡算等乾坤
 八方歌有道之君 四海樂無為之化
 紀伊州日高郡矢田莊
 文武天皇勅願道成寺冶鑄鐘
 (2区)
 勸進比丘瑞光
 別当法眼定秀
 檀那源万壽丸
 并吉田源頼秀 合力諸檀男女
 大工山田道願 小工大夫守長
 (西曆1359/04/09)
 正平十四年<己亥>三月十一日

ABの2鐘が伝来したことは重要である。もしBのみだったら、おそらく様式分類から後世に改鑄された偽鐘と言われたはずである。だがAが伝来したことにより、同じ源万寿丸の奉納鐘との銘文照合が可能になった。

ABともほぼ同文の「銘」刻んだのちに、奉納先・施主・作者の大工小工が連署し、道成寺のものには勸進聖・道成寺別当が名を連ねている。Aの寄進先が土生八幡・飛鳥宮と連記されているのは、近世地誌類に拠れば現在の土生社には飛鳥宮があり、小熊村(川隈)小字「岡ノ段」の八幡宮が移ってきて並んだものという。「千手里」とは土生村「城ノ内」で、源万寿丸の居館があったと伝える(5章参照)。ABの銘文は、すべて陰刻である(原鐘については不明)。

近年、道成寺調査を踏まえて南北朝期の再建を論じた坂本亮太氏は、Bについて「寛延2年(1749)若野村

(日高川町若野)の津村正重が、旧鐘の銘を踏襲して改鑄したものである。明治の廃仏毀釈後しばらく放置されていたが、明治36年(1903)に光源寺に移された」として、「正平13年(1358)源逸見万寿丸が「矢田之庄千手里」(土生)の八幡宮・飛鳥宮に寄進した鐘であることが記され、さらに山田道順の作ということもわかる(中略)道成寺は正平年間(1346~70)に本堂の再建が進められていたが(鳴海祥博「道成寺本堂—建築的特質を探る—」)その過程で道成寺の梵鐘、周辺寺社の梵鐘もあわせて鑄造されていた」としている(6)。

またBについても「かつて道成寺に残されていた梵鐘であり、それが妙満寺に伝えられた後、江戸時代に再度鑄造され、もとの銘文の字体をそのまま再刻したもの」としたうえで、道成寺が矢田莊にあるとする唯一の事例で、「文武天皇勅願」を明記した初例であることを指摘。「吉田頼秀は吉田(御坊市)を拠点とした武士で、道成寺に瓦を寄進することもしていた。また逸見氏も土生(日高川町)を拠点とした武士であり、南北朝期の道成寺の復興が、これらの周辺武士(在地領主)たちによって成り立っていた様子を知ることが出来る」と論じた(大河内2017 220~221頁、坂本2017)。

首肯できる評価であろう。南朝勢力の根強い紀州においても、関東から関東管領畠山国清の軍勢が下向して軍事征服して以後(鐘の寄進された1360年にも畠山国清軍が紀州侵攻、紀北龍門山で膠着して8月没落)、南朝の拠点は大半が失われた。道成寺の周辺地域に正平・天授の南朝年号を用いる在地勢力が存在していたことは重要である。先述の坂本氏が強調するように、



図1 中世吉田莊・矢田莊関係地図(原図 地理院地図 GSmep)

史料2より「諸檀男女」に支持された在地領主の集団であることがうかがえる。『紀伊国金石文集成』(正統)を増補して縦覧した濱崎真帆氏のまとめによると、日高川筋の南北朝期金石文はすべてが南朝年号であるという⁽⁷⁾。日高川流域は突出して南朝勢力の優越したエリアであった。

3 正平の道成寺「再建」事業

坂本氏の指摘するように、ふたつの釣鐘は吉田一道成寺一土生ラインを中心とする熊野道沿いの日高郡における寺領興行、すなわち中世の用法でいう徳政であった。とりわけ、衰微していた巨大寺院の道成寺を再建したことは、地域社会の在り方を変えるものだったはずだ。地域の時間を支配する鐘音が復活したことはこの脈絡の中で考えないといけない⁽⁸⁾。

現在の道成寺本堂がどのように変遷してきたのか、1986年～1991年の解体修理により建築・考古・仏教美術の約5年にわたる総合調査が行われた(和歌山県文化財センター編1991)。道成寺本堂は、正平期(正平12～天授4)に原型ができて、以後享祿(1530湯河氏)・明暦(1655紀州藩)・文化(1812-15)年間に大規模な修造が行われているという。建築・発掘調査報告書(およびその後の発見)により確認された南北朝期の遺物・遺構は以下のとおりである⁽⁹⁾。

南北朝期の本堂データ

瓦 鬼瓦4枚(うち2枚に天授4年吉田金毘羅丸銘)
丸瓦・型式A 154枚(比率36.2%)
平瓦・型式A 249枚(比率56.3%)
「一方檀那源金毘羅丸」天授四年戊午春作之(降棟<北面・東側>=1928修理で降ろす)陰刻
「一方大檀那吉田源藏人頼秀三男源金毘羅丸」天授四戊午季春日造(降棟<北面・西側>)陰刻
丸瓦断片「」二<矣牛>三万五千百六十」作立之

*なお発掘調査出土瓦はすべて古代瓦という・不審部材 仏の間壁板銘

「正平十二<丁酉>正月十九日不断経始 []<□ノトノ巳>遷本堂□(給)」
内陣組物卷斗
「正平二十一 []」

仏像 木像千手観音像(鞆仏・秘仏北向観音)299cm
同胎内廃仏(白鳳期木芯乾漆千手観音部品)
(このうち主要なものは大河内編2017に図版。鞆仏・廃仏の写真は和歌山県2012の45・51頁)

多くの遺物が残っているというだけでなく、現在の道成寺の伽藍配置プランが南北朝期に由来するということところが重要である。瓦については、全体の半数が現役であった(重要文化財指定時の修理で現状変更)。鬼

瓦に見るように、節目の修造では表の面(南側)に新造品を入れて、旧物を北面に回している。南北朝期には北側にあらたに千手観音像(現在秘仏北向観音)を据えている。北向に初めて聖域を作ったことが確実にある⁽¹⁰⁾。

調査を主導した鳴海祥博氏は、紀州中世を代表する「折衷様」の大型仏殿で、正平12年(1357)に立柱の儀式(着工)をして、屋根瓦葺きがほぼ完成まじかになった天授3年(1377)に本尊を遷した20年がかりの大事業と解釈した(鳴海2017)。

一方、A鐘を伝えた土生八幡宮については、明治の神仏分離により別当寺が解体して文書遺物が伝来しない。近世地誌類によれば、正平13年(1358)に万寿丸の母覚性により神田寄進を得て再興されて棟札が残るといふ。覚性の墓は近在の来迎寺にある(現存・室町期宝篋印塔)。やはり道成寺と連動する形で興行が進められていることが確認できる。釣鐘の寄進はこのよう一連の地域仏神興行運動の一過程に位置付けられるのである。

写真4 天授の鬼瓦 右は紀伊名所図会所収の図版



写真5 本堂北面 □が秘仏位置 ○が天授鬼瓦



写真6 境内鐘巻・再興鐘樓の伝承地



現在の道成寺本堂プランは正平の時期に原型ができあがったものであり、現代の道成寺は正平興行の「再建」に起源する。しかもモニュメントの仏像・瓦などは現在も使用されている。

4 紀伊国吉田荘興行と浜寺大雄禪寺

1350～60年代の日高郡において、南朝最期の輝きともいべき再建運動を確認した。この地域の寺社勢力・源姓武士団・住民層（諸壇男女）こそがその担い手であった。守護山名一族・湯河氏・玉置氏らの北朝・幕府勢力によって制圧されるまでの約20年間にわたり、南朝を推戴する地域的一揆状況が実現したのはなぜか。その背景を知る手掛かりが次の文書である。

史料3 後村上天皇綸旨写

○『古文書雑集』（大日本史料）

紀伊国吉田荘領家職、御奉寄大雄禪寺之由、被聞食畢者

天气如此、以此旨、可令申入一品宮給、仍執達如件、
正平十四年十二月三日 少納言行実
謹上 勸解由次官殿
(中御門経高)

紀伊国吉田荘を大雄寺（高石市浜寺）に寄進するという南朝の処置である。年代は史料2の道成寺鐘の銘と同年で、当時後村上天皇は河内国観心寺に本拠を構えて和泉国出張を企てて南北朝合体を模索していた時期という（森1988・116頁、森2005・117-120頁）。

原文書は行方不明で、東京大学所蔵の『古文書雑集』に写された1巻12通のひとつである。『大日本史料』6編に採録されており、南北朝研究者にとっては周知の史料である⁽¹¹⁾。だが、この吉田荘は比定されることがない。吉田自体は低湿地葦田を示す一般自然地名だが、中世史上「吉田荘」で想起される場所は、和歌山市の吉田郷（日前宮封郷）か、岩出市境の吉田（根来寺勢力下）であろう。だがどちらも荘園の実態は欠き可能性は低い⁽¹²⁾。対して、道成寺一帯は鐘供養が行われるほどに安定的な南朝拠点となっており、「紀伊国吉田荘」がこの地である蓋然性は高い。その場合、Bの道成寺鐘

銘と鬼瓦に「大檀那」として現れる吉田藏人頼秀・子金毘羅丸とその勢力圏である吉田山城館・八幡宮に注目しないわけにはいかない（地図参照）。近世になると「矢田庄」という地域概念ができており（吉田・土生・鐘巻・藤井・小熊・千津川）、A B鐘銘にもこの荘園名が刻まれている。だが、このほかに棟札に一例あるのみで（後述）、他の中世史料には見られない。おそらく中央の荘園文書に現れない在地通用地名と思われる。対して、吉田村は領内に二つの熊野王子社（愛徳山王子・九海女王子）がある要衝地の地であり、史料2の藏人の名乗りをする吉田源氏の本拠地である。中世の公的支配者の間では、日高郡道成寺一帯の領主（吉田・土生・源万寿丸ら）の首領の本拠地にちなんで吉田荘と命名されたのではないか。吉田荘の寺社・領主連合が当知行を実現したことを前提に、南朝の大雄寺勢力が領家職（預所）を設定したのであろう。

大雄寺と南朝（後村上軍）の関係についてもふれておきたい。大雄寺は大阪府高石市に所在した大寺院であり、浜寺の通称で知られる。その史料は開山の孤峯覚明（三光国師）の伝記と共に『高石市史』第2巻の編年史料編に収録されている。後村上天皇は大元国への渡航僧である覚明集団を厚遇しており、大雄寺を建立して招聘した（『雲樹寺開山三光国師碑銘』『延宝伝燈録』、高石市1986の中世編207～233号）。天皇は、出雲雲樹寺の覚明に対して「大興禪寺造営料所」として近江・丹波・播磨・備前内の5箇荘地頭職（敵方没収所領）を寄進している（南北朝遺文・中国四国編③2480号「後村上天皇綸旨」雲樹寺文書）。これが正平8年5月22日のことであり、大雄寺はこれを承けての建立だった。父後醍醐の伯耆挙兵に与した覚明に対して厚い信頼があったことがわかる⁽¹³⁾。南朝公卿の中にも覚明に参じた一族があった（花山院長親弟は元要上人で覚明の弟子。深津・君嶋2014、531号）。

一方、高齢の覚明は史料3の吉田荘領家職を得た2年後の正平16年（1361）5月に没する。覚明はかの無本覚心（法燈派）の法を嗣ぐ弟子であり、覚心の基盤である由良興国寺のある紀州日高郡には深い関わりを持っていたのである。覚明死後も、大雄寺長老の職は法嗣の古剣智訥らに受け継がれていく。日高郡の寺社・領主連合は、禅宗勢力を媒介にして中央の朝廷権力と結ばれていたのである⁽¹⁴⁾。

5 源万寿丸＝逸見氏説の源流

道成寺領「再建」の中心人物である源万寿丸は逸見氏であるという。敵対者の湯河氏（伝新宮出身）が、新羅三郎義光流の甲斐源氏武田義清を祖と主張したため、それに対抗する上で同族の嫡流であることを示したためと思われる（系図参照）。地元では、江戸時代に大庄屋になった瀬見・瀬戸氏が万寿丸の末裔を主張し、「紀州郡主旧記」「寛政八年書上（瀬戸氏）」「享保十年・江

表 鎌倉・南北朝期の逸見氏一覧(○数字は巻数) 網掛は万寿丸への系譜か

●在京人・守護家(被官)	
1248 1221守護人逸見入道 承久以後在序に尋沙汰	鎌倉遺文⑩7015久米田寺文書
1234 逸見入道 六波羅より日根荘尋沙汰指令うける	鎌倉遺文⑦4709九条家文書
1247 逸見四郎源義利 北条重時被官	鎌倉遺文補②1366葉黄記
1250 逸見二郎 閑院内裏造管注文の東鱈	鎌倉遺文⑩7176吾妻鑑
1344 逸見源太・逸見七郎太郎 足利直義今熊野参詣供奉 (直義近習在京人)	「師守記」②史料纂集 康永3年5月17日 房玄法印記・観応2年7月30日条
1351 逸見甲斐守 足利直義方として北陸没落	
●和泉国地頭	
1286 逸見六郎有綱 久米田寺領加守郷施行	鎌倉遺文②16099久米田寺文書
1338 逸見四郎源有朝 武田信武配下で堺石津合戦	南北朝遺文中国①742小早川家文書・763吉川家文書
●出雲国	
1271 逸見六郎 出雲熊谷郷17町3反知行	鎌倉遺文⑭10922千家文書
●本領(武田守護家) 甲斐・東国	
1253 甲斐国逸見荘 請所20荘うち冷泉宮領内	鎌倉遺文⑩7631近衛家文書
1275 逸見入道跡 京都六条八幡造管に5貫・甲斐国御家人19名	国立歴史民俗博物館研究報告45
1298 逸見一門 那智山檀那職 讃岐国諸檀越かも	鎌倉遺文②⑥19661米良文書
1326 逸見彦三郎長氏 深沢郷一分地頭	鎌倉遺文③③29446大善寺文書
●鎌倉	
1213 逸見五郎・次郎・太郎 和田合戦討ち死に	鎌倉遺文④2005吾妻鑑

川組社方書上帳」などに過去の事績を書き綴った。多くは天保年間の『紀伊続風土記』『紀伊名所図会』に採用されて、万寿丸が甲斐国巨摩郡逸見牧を名字の地とする甲斐源氏流逸見氏であるという認識は定着した。このような歴史理解は、近代の碩学によって取捨選択されて、『日高郡誌』など地域史料として継承された⁽¹⁵⁾。

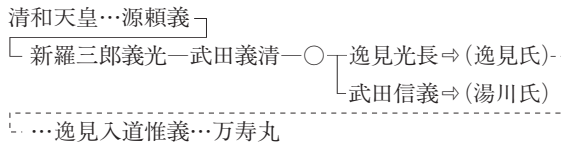


図2 湯川・逸見関係系図

ところで、先述の万寿会作成のチラシ・副読本であるが(写真1)、「もとは甲斐国(現在の山梨県)で生まれた甲斐源氏です。生誕元亨元年(1321年)6月25日。万寿丸の五代前の先祖が和泉国守護になり、大阪府南部に移住したとされています。河内国の楠木氏らと共に、南朝方で活躍しました。万寿丸が生きた南北朝時代は争いの絶えない時代でしたが、万寿丸は天寿を全うしました。その後、北朝方の世になり、子孫は姓を変えて現在に至っています」(裏面)としている。

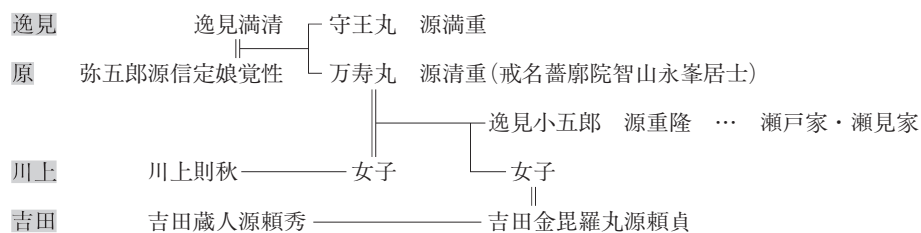


図3 地域的一揆関係系図

全体の構成は子孫瀬戸氏の家伝にもとづいているが、和泉守護家の逸見が南朝方として入部してきたという理解はこれまでの地域史にはなかった万寿会のオリジナルであろう。承久の乱ののちに守護になった逸見氏は、北条氏の専制が強まる中で守護代となって実利を取り(守護は在京)⁽¹⁶⁾、関東出身の地頭たちと土着の国御家人・寺社勢力の利害を調整して生き抜いた。南北朝期以後も、武田氏は本領甲斐国のみならず安芸国・若狭国でも守護になった。逸見はその配下で各地で活躍している⁽¹⁷⁾。

その全体像を確認するのは至難の業だが、目録・索引類を用いて復元してみると、上の表ようになる。

やはり守護・守護代として君臨した和泉国では南北朝期に至るも姿が散見する。南朝方としての活動、大雄寺一帯での事績は未見である。和泉国の大雄寺周辺にあった南朝側近武士団が、紀伊国の南朝方拠点地域である日高郡を梃入れするために派遣されたというのは想定される事態である。和泉国には、河内楠木一族・和田氏・久米田寺などの南朝勢力が盤踞するが、鎌倉時代の元守護家である逸見氏はその最有力の候補である。日高郡の伝承は、短期で減んでいった南朝武士の姿を記憶に留めたものと考えられる。

最後に、道成寺鐘に関するもっとも難解な謎解きを。

逸見万寿丸はなぜ幼名(童名)なのかについてである。近世史料を知らずに、A B鐘の史料1・2のみを読んだ場合、万寿丸が元服前で家名を名乗れず、同族である近隣源氏の吉田頼秀とともに道成寺の再建事業を手掛けたと読み取るだろう。Aが単独なのは、吉田の地から離れた万寿丸の本拠であるからと解釈される。近世家伝中に母覚性の役割の大きいことを知れば、当然実権は後家尼の意志と読み取るだろう。

「吉田蔵人頼秀」の前述天授4年鬼瓦には、万寿丸とともに道成寺鐘を寄進した吉田氏が「蔵人」とされる。ふつうこのような名乗り・官途は先祖の通称として侍身分の表象と考える程度である。私も史料3に気づくまでは同様だった。だが吉田荘が皇室領から大雄寺領になるとすれば、その媒介者である在地勢力が「蔵人」名乗りというのに注目しないわけにはいかない。吉田頼秀といい逸見万寿丸(のち清重)といい、皇室領の代官である蓋然性がますます高まるのである。

だが、「万寿丸 生誕元亨元年(1321)6月25日 死没天授4年(1378)12月22日、源清重・戒名蕃廓院智山永峯居士、墓所瑞雲山来迎寺」という子孫瀬戸氏の言伝えがある。これによると、道成寺鐘の寄進時に万寿丸は38歳の壮年「逸見清重 幼名万寿丸」にならざるを得ない。これにもとづく写真1は、当然ながら烏帽子成・着袴帯刀の成人で、北朝勢力湯川・玉置らと闘う勇者の姿である。身分制の研究成果に依拠すれば、中世には成人しても幼名を名乗り童形(蓬髪・垂髪など)の特殊な集団がいる(神仏に近い職能民や刑吏身分)⁽¹⁸⁾。だが、歴とした武家(私の理解が正しければ天皇の側近武士)が職能民の風体とは想定しにくい。ひとつは近世の家伝の生没年に誤りがある可能性、今一つは神仏に奉納する棟札・梵鐘・仏像の銘文署名に特別なルールがある可能性である。前者であれば話は早いですが、神仏に近づく際に人は「暗号」を使うというのが本式である(南朝使節の万寿丸はまさに伝統世界の体現者)というのは魅力的な仮説である⁽¹⁹⁾。道成寺再建論争にはさらに新たな問題が提起されたことになるだろう。

おわりに 鐘供養の行方

本稿は、道成寺鐘の再建について、日高郡域「吉田荘」における寺社・武家の一揆体制の成立から再考した。その背景には中央における後村上天皇・禅宗勢力の動向があり、逸見万寿丸・吉田頼秀は和泉国大雄寺にゆかりの南朝使節と推測した。畠山・山名の軍事侵攻によって逸見・吉田・禅宗勢力は駆逐されて跡形もなくなり、釣鐘や瓦のみが記憶の断片として残された。

最後に「道成寺物」について展望しておきたい。

鐘銘・音が原因となって悲劇の引き金となる事件は多いが(方広寺鐘銘事件など)、「娘道成寺」のように鐘供養の晴れの場が破局をもたらした事件も実在する。

私は著書『神風と悪党の世紀』の冒頭で考証・紹介したものだが、1301年の鎌倉円覚寺の鐘供養では、儀式の期間ハレー彗星出現により執権北条貞時ら幕府閣僚が辞職した(鐘は現存・国宝)。鐘・仏神像や社殿(棟札)は地域社会における「公権力」であることの証明であり、それを備える儀式は合意のためのハレの重要な空間だった。執権として将軍・天皇にならぶ新たな主催者であることを日本国土に示そうとした北条貞時は、天空の秩序を乱す悪星によって権力を失墜したわけである(海津1998)。かように重要な意味をもつ鐘供養儀礼は、「娘道成寺」のような不吉な説話が伝わった時点で道成寺だけではなくて主催者の源万寿丸・吉田金毘羅丸一党にとって大きなダメージになったはずである。実際、天正の秀吉紀州攻めで京都に持ち去られるまでの間、「不吉の鐘」として廃棄されるなどという多くの伝承が付け加わっていた。

白拍子怨霊の鐘供養破壊の物語、道成寺物「鐘巻」の初見は1477年(『親元日記』文明9年2月13日条)、安珍・清姫の道成寺物語に釣鐘が見えるようになるのは日本霊異記以来で9世紀。一応、歴史的事実の射程に収まるだろう。再興鐘の廃棄をめぐる伝説など道成寺鐘が妙満寺に伝わる過程については今後の課題として残したい。

註

- (1)橋本唯子氏が学術助成を得て近世文書の悉皆調査をすすめていたので(図書館振興財団2015年度助成事業「和歌山県内の歴史資料等のデジタル化および地域連携推進事業」)、2013年度より授業担当(学内兼任)に招聘した。その後、橋本氏が教養課程の常勤教員となり多忙化したため、紀州経済史文化史研究所の大橋・吉村両氏を軸として悉皆調査を継続した。
- (2)平成16年次(2004)は、10月3日を歓迎イベントとして中村富十郎・牧瀬里穂を招いて鐘供養を行ない、同8日に「京鹿子娘道成寺」公演、期間中祝日は日高地方の物産展を境内開催している。「420年の時を超えて」と唄うイベントの色彩が濃かった。
- (3)近年の芸能史の研究でも、能など②の諸作は14世紀に遡るものではなく、道成寺物が正平の梵鐘に影響を与えた事実はないという(吉村2019)。正平の道成寺興行は、ひとまず物語と切り離して史実を確定することができよう(もちろん後世に「不吉の鐘」など牽強付会がなされたことはありうるが)。
- (4)山本氏は、改鑄後に鐘楼に挙げられた形跡がないのにも関わらず、摩耗した形が摸刻されていることなどの妙満寺調査実物観察から、改鑄鐘(今のもの)が原状を踏襲しているという見通しを示した。銘文がそのまま刻まれたという論点を補強する重要な観察であろう(山本2005)。
- (5)A Bふたつの鐘銘については、坪井1972、巽・愛甲1974、大河内編2017の坂本亮太氏判読を参考にした。巽・愛甲1974はA B両方とも改鑄鐘であるため「亡失遺物」として末尾に収録している(396-397頁)。Bの道成寺鐘については近世地誌類に妙満寺鐘として多く引用されている。一方地元にあるはずのAの銘文史料1は管見の限り所引事例がない。寛延改鑄以後、19世紀後期には地元から離れていた可能性がある。

煩雑になるので省略した廃仏毀釈の時の追刻は以下のとお

りである。山本2005に随った。

〔池の間4区〕

丹生村字和佐

光源寺住職 木坊子 宗実
妻 静家
御仲中

世 話 人

ワカノ

玉置喜一郎

東 岩吉

野田才五郎

津村 哲三

前田 弥吉

上杉 達三

吉田 亀吉

玉置喜四郎

川口音治郎

栖原 庄衛

江川

中 彦四郎

久留米佐市

柏木吉右衛門

井口 和吉

玉置 房吉

明治参拾六年九月調之

- 〔 〕
- (6)引用文中の山田姓日高郡の大工集団については南部荘との関係が指摘されている。南部荘の荘鎮守御霊宮(現須賀神社)棟札を検討した坂本亮太氏は、南都系の宮大工による神社造営が室町期に初めて地元の大工に切り替わるといい、その大工集団の頭が藤原定次「土生矢田荘住」だったことを明らかにした(海津編2002・史料R129頁)。一方、南部荘は鎌倉時代以来の鍛冶・鋳物師集団(中世・近世の高田鋳物師)の本拠地であり、山田鍛冶の名前は13世紀から見えている。道成寺鐘の大工である山田道順・道順は南部荘の大工集団と考えられる(海津2007)。史料1に「神前治鋳鐘」とあるのは境内で作業したのだろうか。道成寺の再建事業とともに、南朝勢力のプロバガンダであったに違いない。
- (7)濱崎真帆氏の卒業論文によれば、南北朝期の金石文における南朝銘文の比率は、有田川流域27%、熊野地域22%、高野地域28%、紀ノ川流域51%、日高川流域100%であり、日高郡は突出している(もちろん道成寺の金石文はすべて計算)。紀州全体では北朝年号が60%、南朝年号37%である(100%にならないのは不明分あり、濱崎2016)。
- (8)棟札・梵鐘・仏像などの銘文は、地域の領主の変遷を知るために活用されてきた。しかし近年の史料学的検討によって、地域の神々に回路を拓くという中世的な合意を示す材料として再評価されている。つまり武力で軍事占領して寄進したとしても地域社会は受け入れないのである。坂本亮太氏の日高郡南部荘の棟札研究はその一例だろう(海津編2002・史料R103-130頁)。
- (9)1986年に着手より1991年まで、本堂を全面解体して瓦を下し、基壇の発掘調査を行なうという全面調査であった。この修理は建物を創建当時の姿に戻すことが目的とされているが(大河内編2017・183頁)、原型とは事実上の南北朝期本堂であった。章タイトルを「再建」としたのは事実上の創建に他ならないことを示唆するためである。
- (10)発掘調査によれば南北朝期には正面の南側に版築して本堂の基壇を大きく広げている。北向の設定に連動した新たな空間プランであろう(和歌山県文化財センター1992、284頁図)。

- (11)史料1 2 3を一連の流れで見た場合、所領寄進が最後になっていることに違和感をもつかもされない。だが中世の安堵は、当事者による自力救済が基本であり、当知行を事後追認してもらうのが本来である。近世以後のような石高配布とは違っている。寄進年次が、道成寺興行中の時点であるのは何ら不都合なことではない。また荘園の領家職(預所)設定についても、同郡内の財部荘領家職を後醍醐天皇が「熊野山新宮一味衆」に与えている(小山文書)。この当時の南朝の所領給付の常道である。
- (12)濱崎真帆氏の南北朝金石文分類表によれば、1352~1366年の間和歌山市・岩出市の紀ノ川一帯に南朝年号が15体集中し、なかに上岩出神社板碑(根来寺東坂本)も正平16年銘である(濱崎2016)。だが局地的に20年に及んで南朝の勢力が興行した日高郡とは異なる。
- (13)史料3の後村上天皇綸旨は、大雄寺への寄進を「一品宮」に申し入れるという指令になっている。この人物は寺院の統括者であろうか。大日本史料は興良親王(護良の子)に比定し、森茂暁氏・深津睦夫氏ら『新葉和歌集』を重視する研究者は新宣陽門院を示唆する。新宣陽門院について、森氏は南朝系図が後村上皇女憲子とすることを指摘し(森2005・151-158頁)、深津睦夫・君嶋亜紀氏は「後醍醐天皇皇女、母は阿野廉子、後村上天皇の住吉行宮時代に住吉もしくは近郊に所在。一品宮と称し、正平24年(1369)以降に院号宣下」と注釈している(久保田淳2014)。興良親王はこの時期南朝に反旗を翻すなど独自の立場を表明しており、想定しづらい。後村上の実姉妹とした場合、観心寺御所に居る後村上天皇が覚明の大雄寺に近い和泉に居る一品宮に対して綸旨を回したという解釈がなりたつだろう。充所の中御門経高が側近蔵人(この時期の綸旨奉者)であることはいままでのない。
- (14)この理解を成り立たせるためのネックは、道成寺と法燈派禅宗との関係であろう。南朝浜寺の力を背景にして寺領興行をした以上、何らかの宗派的な影響が見られるはずである。浜寺が地名を残して消えたように、現在の道成寺にも覚心の影響力は残っていない。Bの法眼定秀は当時の道成寺住持と思われる、勧進僧の瑞光とともに、本末関係の有無を知る手掛かりとなるだろう(小野俊成氏のご教示による)。また『紀伊統風土記』『紀伊名所図会』には小熊村矢田谷の宝篋印塔が覚心母姉の比丘尼寺跡とする法燈国師伝説がある。後考を期したい。
- (15)森進太郎氏の編著である『日高郡誌』(復刊時には上下巻)1923年は、史跡・伝記について典拠となる史料を収録・明記する方針で、忠君伝承などにも禁欲的な姿勢で一貫している。大正自治体史の到達点を示すものであろう。国会図書館デジタルコレクションで完全公開されている。
- (16)鎌倉遺文補②1366「葉黄記」。宝治1年の京都今日吉社小五月会(軍事パレード)では、逸見四郎源義利が六波羅探題北条重時配下で一番流鏑馬射手役を勤めている。逸見義利が探題被官になっていたことが確認できる。
- (17)和泉国は地頭がすべて東国下り衆であり、その下の国御家人が地元武士という明快な特徴を持つ国である(山田・阿部1979)。東国武士である守護逸見は、地頭たちを束ねる代表であると同時に、国御家人層との利害調整を担当するという難しい役どころであった。鎌倉幕府の滅亡により不在地の地頭領の大半は地元領主に横領されたが、守護代官として根を張る和泉逸見氏はしぶとく生き延びている。南朝か北朝かという選択肢は、倫理的なものでなく単なるサバイバルにすぎないが(楠木正儀のごとく)、和泉逸見氏のなかにも南朝勢力のものがみえる。
- (18)中世人のライフサイクルが、童から人への成人を大きな画期とすることは1980年代の社会史研究―身分研究で大きく進展

した。通常男は14歳前後で成人し、童名(わらわな)から実名を名乗るようになる。だが、牛車引きや、検非違使の放免の如く、生涯を「何丸」という童名・童形で終わる身分もあった。その理由については論争があるが、網野善彦氏の如く「常人にはない呪力を持つため」という積極面から捉える理解がある(網野1989・1994)。網野善彦の説によれば、元服前の子どもには、大人が失ってしまった力一神仏に通じる霊力が備わっており、子どもであることに意義があるという。万寿丸の場合、鐘供養という神仏の意志問う儀礼では子供の霊力が重要だったはずである。

(19)今回金石文史料論を通読して見たが、金石に陽刻印刻する際の技術的問題にもとづく字体については言及が多いが、署名について論じたものはなかった。だが願主に幼名が多いと思われることは経験則で感じられるし、一例ではあるが鐘銘中に成人の幼名併記した願主「大檀那留守藤原朝臣藤王丸」の事例を見出した(坪井1972、1415号明応6年塩竈宮鐘)。願文・起請文に視野を広げて追及を重ねたい。

参考文献一覧

- 網野善彦『中世の非人と遊女』3章明石書店 1994年
 網野善彦編『名前と系図・花押と印章』(週刊朝日百科日本の歴史別冊・歴史の読み方8) 1989年
 五十川伸矢『東アジア梵鐘生産史の研究』岩田書院 2016年
 遠藤廣昭編『中世の梵鐘 物部姓鋳物師の系譜と鋳造』横浜市歴史博物館 2000年
 大河内智之編『道成寺と日高川—道成寺縁起と流域の宗教文化』和歌山県立博物館 2017年
 大橋直義編『道成寺の縁起 伝承と実像』和歌山大学紀州経済史文化史研究所 2016年
 大橋直義編『紀州地域と西国順礼』和歌山大学紀州経済史文化史研究所 2017年
 大橋直義編『泉州岸和田の宗教文化』和歌山大学紀州経済史文化史研究所 2021年
 海津一朗『新 神風と悪党の世紀』文学通信 2018年
 海津一朗『彗星』竹内誠ほか編『方法教養の日本史』東京大学出版会 1997年
 海津一朗編『中世再現1240年の荘園景観—南部荘に生きた人々—』2002年
 海津一朗『『民衆の城』の社会史—紀伊国南部荘高田土居と職人集団—』阿部猛編『中世の支配と民衆』同成社 2007年
 海津一朗編『新編道成寺縁起絵解き』和歌山大学紀州経済史文化史研究所 2011年
 久保田淳『新葉和歌集』和歌文学大系44明治書院 2014年
 坂田 聡『苗字と名前の歴史』吉川弘文館 2006年
 坂本亮太編『きのくにの城と館 紀中の戦国史』和歌山県立博物館 2014年
 坂本亮太『日高川流域の中世』(大河内編2017所収) 2017年

- 巽三郎・愛甲昇寛『紀伊国金石文集成』熊野速玉大社 1974年
 巽三郎・愛甲昇寛・小賀直樹『紀伊国金石文集成 続編』巽三郎 1995年
 坪井良平『日本古鐘銘集成』角川書店 1972年
 鳴海祥博『道成寺本堂—建築的特質を探る—』(大河内編2017所収) 2017年
 濱崎真帆『南北朝時代における金石文の紀年銘と湯浅党—有田川流域を中心に—』(2016年卒業論文 海津研究室蔵)
 森 茂暁『皇子たちの南北朝 後醍醐天皇の分身』中公新書 1988年
 森 茂暁『南朝全史』講談社選書メチエ 2005年
 森彦太郎編『日高郡誌』和歌山県日高郡 1923年
 山下 立編『懸仏の世界』滋賀県立琵琶湖文化館 1997年
 山田安利・阿部猛『鎌倉期における和泉国の地頭御家人について』『東京学芸大学紀要3 部門社会科学』30 1979年
 山本真由『道成寺鐘の真実—光源寺鐘との比較を通じて—』(2005年卒業論文 海津研究室蔵)
 吉村旭輝『「道成寺物」の流行による道成寺と熊野参詣道の変容』『芸能史研究』224 2019年

<機関>

- 高石市史編纂会『高石市史』第2巻 1986年
 道成寺発掘調査委員会編『道成寺 道成寺発掘調査報告1』天音山道成寺 1978年
 和歌山県教育委員会『道成寺調査報告書』2012年
 和歌山県文化財センター編『重要文化財 道成寺本堂・仁王門修理工事報告書(本文編)(図版編)』道成寺 1992年

付記)成稿に際して大橋直義氏、吉村旭輝氏、小野俊成住職、井田寿邦氏より格別のご教示をいただいた。記して感謝申したい。

また展示期間中に、万寿丸の子孫という系図を所持する岡山県逸見家の存在を知った。詳細は後日の紹介に依りたいが、万寿丸(小三郎満俊とする)・守王丸(清俊とする)兄弟の逸見系図であり所伝のみに依拠していた源万寿丸=逸見氏説は大きく前進したといえよう。

本稿は2016-19年JSPS科学研究費「中世紀伊半島における歴史遺跡・名所の創作および活用データベースの作成」(代表海津一朗)の成果である。

付記2)審査修正原稿提出後に大橋直義著「道成寺創建縁起と『道成寺縁起』」(『中世文学』66、2021年6月刊)を知った。本稿の史料3、史料編纂所蔵色川三郎兵衛編『古文書雑集』謄写本第七冊所収の後村上天皇論旨に特別の注目をして、道成寺創建縁起の成立と正平の道成寺再建の関係を説いた仕事である。再建論争にとって重要な視角なので併照いただきたい。大興禅寺が水無瀬に予定されていたという先行研究についても同氏の御教示を得た。